

青木周弼の医学修業

森 川 潤

(受付 2011年5月30日)

はじめに

『近世名医伝』は、周弼の経歴についてつぎのようにしるす¹⁾。長文であるが、活字化されていないので全文掲げる。

青木周弼。名邦彦。號_二月槁_一。周防大島郡人也。家世行_レ醫。父玄棟嘗應_二豫人之聘_一。開_二業於其地_一。後為_二一醫生所_一妬忌。因衆辱_レ之。玄棟臨_レ死慨然戒_二周弼及次子研藏_一曰。汝曹宜_レ就_二良師_一。大成_二學業_一。以償_二余志_一矣。周弼既長。入_二長門藩醫能美估菴門_一。學_二漢醫方_一。時蘭人施勃兒薦_二在長寄_一醫名藉甚。周弼聞和蘭醫方之精妙。乃往而受_レ業。既而恐_レ触_二幕禁_一。去遊_二江戸_一。寓_二坪井誠軒塾_一。旁入_二宇田川榛齋門_一。研精勵刻。業益進。居數年。再來_二長寄_一。始開_レ業焉。病客恒盈_レ門。治效頗多。藩侯聞_二其名_一。聘列_二醫員_一。給_二祿廿五石_一。乞_レ治者益多。執_レ贊受_レ教者常垂_二百餘人_一。天保壬寅。建_二言藩侯_一。新設_二醫學教授所_一。名曰_二好生館_一。使_二醫生就_レ館講習。以大振_二興闡藩醫風_一。嘉永初。擢為_二藩主侍醫_一。加_二給祿百石_一。扈_レ駕來_二往于江府_一者十數回。周弼夙知_二種痘術之鴻益_一。然每以_二無_レ用_一由獲_二其種_一為_レ憾。會聞_二蘭人齋_一之至_二長崎_一。急遣_二弟研藏_一。始獲_二其種苗_一。乃先試_二之己子女_一。尋請_二藩主_一。遍施_二行邦内_一。且百方計_二畫其普及永續之方_一。安政中帑狼痢病之流行也。世俗未_レ覺_二其為_一傳染病_一。醫亦無_レ能治_レ之者。周弼慨然日夜拮据。講_二豫防及醫治法_一。請_二藩論_一之管下醫生_一。且權_二以_一好生館_一為_二病院_一。使_二藩醫宿直_一。以應_二其急_一焉。民由以免_二橫殤_一者許多矣。周弼平生以_二紹_一述父志_一為_レ故終身勤勉雖_二分陰_一不_レ敢徒費_二至_一病革之日_一手尚不_レ釋_二卷所_一著有_二醫院類案_一。察病論。袖珍内外方_一。病理論等數種。未_レ上_二梓_一。其梓行者。特為_二察病龜鑑_一三卷。蓋奉_二榛齋遺命_一所_レ譯云。萬延元年没。以_二弟研藏_一為_レ嗣。

資料をおぎないながら、読みください。青木周弼は、享和3(1803)年1月、周防国大島郡和田村の地下医青木玄棟の長男に生まれる。玄棟は、医者としての識見と技倆を侮蔑された経験があり、臨終のさいに周弼と次男の研藏に良師につき、医術を修得するよう遺言する。周弼は、文化11(1814)年、周防国三田尻の萩藩医能美友庵の学僕となり、漢方医学をまなぶ。そのころ、長崎のオランダ商館医官シーボルトの名声がたかく、オランダ医術が精妙であることを耳にし、周弼は長崎におもむき、シーボルトの講筵に列する。しかし、幕府の禁令にふれることをおそれ、江戸に遊学する。坪井信道の塾に寄寓し、かたわら宇田川玄真の門で

も精励し、学業がすすむ。数年、江戸に滞在し、ふたたび長崎におもむき、はじめて開業する。治効があがり、患者がたえることがない。「長崎では周弼の事を神様のやうに思つて居つた」²⁾。萩藩主は、その名声を聞きおよび、藩医に登庸し、年米25石を支給する。周弼は、萩城下の絹織屋町に居をかまえ、開業し、家塾をひらく。萩でも患者が門にあふれるだけでなく、入門し、教えを乞うものはつねに100人をこえる。天保13(1842)年、藩主に建言し、医学校を創設し、好生館と名づけ、医生に講習させる。それにより藩の医風はおおいに振起する。嘉永初年、周弼は侍医に任じられ、100石を給与される。以後、藩主参観に10数回扈從する。周弼は、天然痘の予防のために種痘が有効であることを承知していたが、オランダ人が痘苗を長崎にもたらしたことを聞知し、弟の研蔵を派遣し、痘苗を入手する。まず自分の子女にこころみ、成功すると、藩主に乞い、藩内全域で牛痘接種を実施する。永続的に実施する計画をたてる。安政年間にはコレラが流行するが、庶民はそれが伝染病であることを知らず、医者も治療することもできない。周弼は、日夜、拮据し、その予防法と治療法を講じ、藩許を得て藩内の医者に論じる。好生館を病院とし、藩医を宿直させ、急患に対応させる。そのために、藩民の多くは横死をまぬがれる。周弼は、父の志をつぎ、生涯勤勉に徹し、寸暇を惜しまず、浪費を避け、病勢があらたまつたときにも書物を措くこともない。訳著に『医院類案察病論』、『袖珍内外方叢』、『病理論』などがある。いずれも板行されなかったが、板行したものとして『察病亀鑑』がある。旧師宇田川玄真の遺命に奉じたものとおもわれる。『察病亀鑑』は、実際には鳥取藩の青木浩斎が訳述し、安政4(1857)年に上梓したものである。万延元年に没し、弟の研蔵が継嗣となる。

『近世名医伝』の記述内容は、日野宗春がしるした周弼の略伝に依拠するものである³⁾。宗春は、文政10(1827)年に周防国大島郡久賀村の地下医山県玄敬の三男に生まれ、嘉永元(1848)年3月に周弼の家塾に入門し、同4(1851)年8月まで在籍する。周弼の門人である。

本稿では、周弼が萩藩にどのような西洋医学の息吹を吹きこもうとしたのであろうか、その一端をあきらかにするために青木周弼の医学修業時代の足跡をたどる。周弼には、いくつかの訳述書がある。それらについては、大坂や江戸での遊学中に訳述されたものとおもわれない。しかし、西洋医書の訳述は医学修業の一環である。訳業も修学過程にふくめなければならぬ。

I. オランダ語の学習

周弼は、享和3(1803)年1月、周防国大島郡和田村の地下医青木玄棟の長男に生まれる。文化7(1810)年ころから近傍の大浜八郎と埴生善左衛門の寺子屋にまなぶ。埴生善左衛門は、下地知行をもたない無給通^{むきゅうどおり}以下の毛利家の下級家臣である⁴⁾。やがて近郷の人びとから神童と称えられる⁵⁾。周弼は、文化11(1814)年、12歳のとき、父玄棟の旧師である周防国三田

尻在住の能美友庵の学僕になる。友庵は、当時、藩主毛利齊熙^{なりひろ}の御側医であり、萩藩ではじめて「蘭方医学」をまなんだといわれる⁶⁾。周弼は、玄関番や使い走りをして、留守をあずかる長男の洞庵のもとで修業をはじめた。かたわら、かつての洞庵と同様に、郷校の越氏塾において漢学をまなぶ。

防長両国へ移封後、毛利氏は慶長年間（1596～1615）に御船倉を下松から三田尻へうつし、御船手組の根拠地とする。同時に、参勤交代の発着地となり、御茶屋が造営される。越氏塾は、もともと儒医河野養哲の私塾であったが、享保年間（1716～1735）に萩藩学明倫館が管轄する郷学三田尻稽古場になり、船手組に属する藩士の子弟をうけいれる。稽古場は、万延元（1860）年に学習堂、元治元（1864）年に講習堂に改称するが、すでに町人や農民の子弟もうけいていた。周弼が三田尻稽古場にかよっていたころには、吉武江陽が督学につき、今津^{どうえん}桐園が都講に任じていた。嘉永元（1848）年、明倫館が徂徠学派を一掃し、「講學之儀ハ朱子之説」を正学とする⁷⁾ ことになると、三田尻稽古場は明倫館にならい、徂徠学から朱子学に転じる。周弼は、徂徠学をまなんだことになる。周弼は、文政3（1820）年ころまで能美家で修業をつづける。図1は、山口県文書館所蔵の「行程記」にみられる三田尻町の絵図である。絵図左に御茶屋があり、その右、すなわち東に中町をはさみ、越氏塾がみえる。越氏塾は、安永8（1779）年に上ノ丁に新築されるが、老朽化したために、万延元（1860）年に図1の位置に移転新築される⁸⁾。



図1 周防国佐波郡三田尻町⁹⁾

『近世名医伝』によれば、周弼は能美友庵のもとで漢方医学をまなんだのちに長崎におもむき、「施勃兒薦」、すなわちオランダ商館医官シーボルト（Philipp Franz von Siebold）の講筵に列する。しかし、幕府の禁令にふれることをおそれ、江戸に遊学した、というのである。シーボルトは、文政期と安政期に2度来日するが、塾生をうけいれたのは文政期（1818～1829）である。シーボルトは、文政6（1823）年8月に来日し、文政11（1828）年10月にはシーボルト事件により抑留される。周弼は、文政3（1820）年ころから文政9（1826）年ころまで大坂に遊学する。周弼がシーボルトに師事したとすれば、大坂遊学中か、大坂からかえったのちのことである。真偽のほどはわからないが、シーボルト事件に連座するのをおそれ、周弼が長崎から江戸におもむいたとすれば、周弼の江戸遊学の時期は符合しない。

『近世名医伝』はふれていないが、周弼は、おそらく三田尻での漢学修業をおえたのち、「蘭学の修業を志して」上坂し、文政9（1826）年ころまでとどまる¹⁰⁾。そのころ、大坂では、橋本宗吉、斎藤方策、中天游の3人の西洋医の名声がたかかった。京都には、小石元瑞、新宮涼庭といった西洋医がいた。しかし、「當時京阪間、原書未_レ行、概唯講_二譯書_一」¹¹⁾、すなわち大坂や京都では西洋医書の原書が講読されることはなく、おおむね訳書が読まれていた。

周弼が大坂に遊学したとすれば、友庵は斎藤方策を紹介したであろう。方策は、明和8（1771）年、周防国佐波郡の地下医の家に生まれる。はじめ三田尻の能美友庵のもとで漢方医学をまなぶ¹²⁾。寛政元（1789）年に大坂におもむき、関西蘭医学の開拓者である小石元俊のもとで漢蘭折衷の医学をまなぶ。その後、小石元俊のすすめにより大槻玄沢の芝蘭堂に入門する。江戸では、宇田川玄真にも師事する¹³⁾。方策は、寛政12（1800）年ころ大坂にもどり、開業し、のちに藍塾をひらく。大坂にもどってから20年たち、50歳になった方策は、文政5（1822）年8月末から10月はじめにかけて、大坂で猖獗をきわめたコレラの治療にあたる。同年秋には『把而翁湮解剖図譜』を訳了する¹⁴⁾。『把而翁湮解剖図譜』は、ベルギー・フランドルの解剖学・外科学教授パルファン（Jean Palfin）が1719年に刊行した原著の再版を翻訳したものであり、京都の中屋伊三郎が複製した精巧な銅版の附図40葉を収録する。方策は、文政6（1823）年12月に在坂御雇の萩藩の一代藩医に登用される。

周弼が、宇田川玄真、橋本宗吉、山村才助とともに芝蘭堂四天王として知られる斎藤方策に師事したとすれば、オランダ語の基礎はまなんだはずである。坪井塾の同門になる緒方洪庵は、文政9（1826）年に中天游の思々斎に入門する。天游は、『把而翁湮解剖図譜』の共訳者であるが、訳書によって西洋の医説を講じるだけで、「和蘭語は讀めなかった」といわれる¹⁵⁾。しかし、洪庵は、坪井塾入門後1年半あまりたった天保3（1832）年12月に『人身究理学小解』を訳了しているところから、大坂遊学中にオランダ語の基礎を習得していたとおもわれる。

周弼は、天保2（1831）年ころに江戸にのぼり、旧師能美友庵の紹介により、当時、「三大西洋家」の世評がたかい坪井信道¹⁶⁾の安懷堂に入門する。信道が江戸深川上木場三好町の借

家で安懷堂をひらいてから、わずか2年ののちのことである。そのころには、塾則がさだめられる¹⁷⁾。

塾則。

一、禁酒。

一、禁外宿。

一、金銭諸貨ヲ貸借スルコトヲ禁ス。

一、俗謡、淫楽、拇戦等ノ雜戯、総テ之ヲ禁ス。

一、各人、毎月他出符五枚ヲ得、一出スル毎ニ一符ヲ返ス、符尽レハ復出スルコトヲ許サス。

一、他出、暮七時半限、帰塾夜五時限之事。

一、万一要用有之、或ハ病氣等ニテ、門限ニ相後レ候歟、或ハ不得已、外宿致シ候節ハ、請人罷越、委細相断可申事、若請人自身来ルコト能ハサル時ハ、必直筆ヲ以テ急度相断可申事、且次月ノ他出符一枚ヲ相減候事。

一、漫ニ外人ヲ止宿セシムルコトヲ許サス。

一、毎朝講釈之節ハ、兩塾不残出席可申事、妄ニ欠席申間敷候、且ツ講席終り候迄ハ、退席無用ノ事。

一、塾師会席ハ各々學問ノ浅深ニ随ヒ、何レノ会ニテモ相定メ、妄ニ欠席不相成事、会席終り候迄、退席無用之事。

一、調合場当直二人、十日代り、玄関取次二人、是亦十日代り、取次ノ方ハ、新来四人ニテ相勤可申事、丸散剉煎等繁劇ノ節ハ、取次ノ方ヨリ相助可申、当番相済、新当番ニ相渡ス節、藥物差支無之様、逐一檢点シ、相渡可申事。

一、塾師代診ハ、当診相省候事。

一、塾中諸子各々所属之塾師ニ随ヒ、日々教授ヲ受候事、毎月廿九日鳥目二百孔ツツ塾師ヘ相納メ、其勞ヲ謝シ可申事、之ヲ學半錢ト名ク。

一、毎朝汲炊ヲ助候下男ヘ、塾中ヨリ鳥目五十孔ツツ毎朝遣シ可申事、之ヲ汲炊錢ト名ク。

一、毎日諸子ヨリ鳥目二錢ツツ相集メ、塾師方ニ積ミ置、半月毎ニ師家ヘ相納メ、以テ塾舎戸障疊等破損修復之用ニ供積ス、之ヲ給復錢ト名ク。

一、塾中万事、塾師ノ指揮ニ相背申間敷事、藥室ハ代診ノ指揮ニ任セ可申事。

右十七ヶ条、之ヲ塾則トス、若シ違背スル輩ハ、罪科ノ輕重ヲ論セス、早々退塾可申事。

周弼は、入門時に「束脩」金100疋、「扇子料」金50疋、信道夫人に金50疋、「塾頭」に金50疋、2人の「塾監」にそれぞれ「半紙二帖」、「同僚諸子」に「半紙二帖」、「僕」、すなわち下男に「錢二百文」をおさめる。1疋は10文に相当する。塾生は、そのほかに半年分の授業

料として盆暮れに「黒豆一升」をおさめるだけである¹⁸⁾。安懷堂の束脩は、伊東玄朴の象先堂の束脩の半額である。

私費遊学生である周弼は、内塾生として入門をゆるされる。信道は、やがて患者もおおくなり、塾生もふえたために、天保3(1832)年には深川冬木町に家屋を新築し、日習堂をひらく。信道は新居にうつるが、安懷堂もそのままのこす。周弼も日習堂にうつったとおもわれるが、あきらかではない。信道の深川冬木町の居宅は、信道の家族の居住空間、病院の空間、日習堂の空間からなる。冬木町の往来に面した8畳の前塾、裏庭の別棟の10畳の後塾と3畳の塾頭室、2階の8畳と6畳の間が塾生の学習と生活のための空間である。

信道の居宅のなかの塾の空間に起居する内塾生は、「其ノ勞ヲ謝シ可_レ申」ために「学半銭」として「毎月廿九日、鳥目二百孔ヅツ」、すなわち毎月200文づつおさめる。「塾師」は、そのなかから下男に「汲炊銭」として毎朝50文づつ手渡す。自炊する塾生のために火をおこし、水を汲む下男へのささやかな慰労金である。「塾師」は、そのほかに受け持ちの塾生から毎日2銭を預かり置き、「給復銭」として半月ごとに師家におさめる。「給復銭」は、「塾舎、戸障、畳等破損修復」のためにつかわれる¹⁹⁾。部屋代のかわりに修理修繕費用が徴収される。

坪井塾の塾則は、日常生活についても詳細にわたり、飲酒、外宿、金銭諸貨の貸借、俗謡淫楽拇戦等の雑戯を禁じ、門限の厳守をもとめる。塾生が塾則に違反したばあいには、軽重にかかわらず、即刻退塾させられる。厳格な塾則は、のちに門生に継承される。

坪井塾の日常生活は、信道の朝講にはじまる。毎朝の信道による講釈には、安懷堂だけでなく、日習堂の塾生も出席しなければならない。安懷堂に起居する塾生は、「講釈」を聴くために日習堂まで10分足らずの道のりをかよう。講釈の内容は、「解剖・生理・藥物・病理・診断等の諸學」に関するものである²⁰⁾。信道が朝食をすませ、往診にでかけると、上級の塾生が代診にあたり、そのほかの塾生は学習にとりくむ。坪井塾における毎日の学習風景は、つぎのようなものである²¹⁾。

皆塾頭並に其下に居る五、六人の先輩の塾生が他の者の手引をするので、塾室の彼方此方に一団をなしつゝ、机を並べ、夜は各々種油のランプを点し鼻の孔を黒くして学んだ。

月に何回か、例へば一・六とか三・八とか日を定めて、一同が集まつて塾頭の支配で回読を遣り又は講釈があつた。

塾の空間の随所に、「先輩の塾生」、すなわち塾師を中心にして机をならべる「一団」は、「塾師会席」であり、「学問ノ浅深」により振り分けられた塾生の学習グループである。塾生は、毎日、「所属之塾師」が主宰する「会席」に参加する。塾生は、蘭書を解説する能力を身につける段階から、「能治^{スル}難_レ治之技倆工夫」にすぐれた西洋医学²²⁾をまなぶ段階にいたるまでに、いくつかの段階をふまなければならない。坪井塾では、塾主坪井信道のもとに、塾頭—塾監—塾師—塾生という運営組織が形成される。それは、同時に教育・学習組織でも

あり、習熟度別の等級制でもある。塾則などからは、詳細を窺い知ることはできない。

蘭学塾における等級制は、儒学塾において考案されたものを精緻にしたものである。管見するかぎりでは、亀井南冥が明和元(1764)年に福岡唐人町にひらいた私塾蜚英館の学規にその原型がみられ²³⁾、南冥門下の広瀬淡窓が九級の月旦評にうけつぐ。淡窓はつぎのように述べている²⁴⁾。

當時ハ余カ門人垂帷テ講業者。諸國ニアマネシ。皆月旦ヲ作ラサルハナシ。余カ門人ニアラサル者モ。亦其風ヲ聞キテ。之ニ倣フ者多シ。或ハ文學ニ與ラヌ他ヲナス者迄モ。往々此風ニ倣ヘリ。

月旦評は、「塾生全員の課業（素読、会読、習字、数学等）、および試業（詩・文）・解説等の優劣を審判し、九階級に分けてその学業の程度を明確に示す」ものである²⁵⁾。塾生の学習の段階は、無級、9級上下の19の等級にわけられる²⁶⁾。

- 九級 上 文五十篇、詩五篇
下 伝習録、近思録、管子、墨子、淡窓六種
- 八級 上 資治通鑑後半、世説荀子、名臣言行録、文中子
下 八大家、資治通鑑前半、莊子
- 七級 上 漢書講、書経講、遠思楼詩誌
下 史記講、詩経講
- 六級 上 左伝後半講、国語講
下 文範講、左伝前半講
- 五級 上 孟子講義、孔子家語講義
下 日本外史講義、論語講義
- 四級 上 十八史略暗記、蒙求暗記、中庸講義
下 十八史略抜粹、大学講義
- 三級 上 孝経講義、国史略講義
下 書経素読、詩経素読、易素読
- 二級 上 春秋素読、礼記素読
下 孟子素読、小学素読
- 一級 上 孝経素読、論語素読
下 大学素読、中庸素読
- 無級

豊後日田の咸宜園では、等級ごとに課書が設定され、素読、講義といった学習方法も指定される。進級するためには、それぞれの課業に専念し、月に1度の奪席会と呼ばれる厳格な試業により上級の席を奪いとらなければならない。こうした厳格な試業とむすびついた月旦

表の原理が門人を介して全国にひろまる。淡窓の門人ではないものも、評判を聞き、多くのものが月旦表をとり入れる。漢学者だけでなく、「他藝ヲナス者」、すなわち蘭学者のなかにも月旦表の原理をとり入れるものもある。高野長英、大村益次郎、上野彦馬といった蘭学者も咸宜園から巣立ち、それぞれに蘭学塾をひらく。

周弼の旧師である坪井信道は咸宜園の塾生ではなかったが、私的な交遊をとおり薫陶をうける。信道は、わかいころ、漢方医学と詩文の修業のために、九州を巡歴していたが、文化10(1813)年に豊後日田におもむき、豆田村の漢方医三松齊寿（蘭雪）のもとで修業する。淡窓は、信道についてつぎのようにしるす²⁷⁾。

尾州ノ醫生ニ坪井環ト云フ者アリ。三四年來。三松齊壽ノ家ニ寄寓シテ。醫ヲ學ヒ。常ニ余カ家ニ往來セリ。極メテ才氣アリ。志願アル者ナリ。此年ノ冬當彊ヲ辭シ去リシカ。其後モ兩三度來遊セリ。

淡窓は、信道について「此ノ人後年東都ニアリ。稱ヲ改メテ信道ト云フ。蘭學ヲ唱へ。當世ノ一名家トナレリ。余カ門人醫ヲウ者。往々其門ニ入レリ」ともしるす²⁸⁾。

信道は、齊寿が調合した薬をとどけるうちに、淡窓の詩会に参加するようになる。詩会への参会がゆるされたのは、詩文の「才氣」がみとめられたからである。後年、信道は江戸に蘭学塾をひらき、「當世ノ一名家」となる。咸宜園の塾生になかには、漢学の基礎的教養を身につけたのち、坪井塾にすすむものもいた。それは、淡窓がすすめたからである。淡窓は、みずからつくりあげた月旦表の原理にもとづく教育・学習のシステムに自信をいっていた。淡窓が蘭学をころざす塾生に坪井塾をすすめたのは、信道が教育・学習の効率という観点から月旦表の原理にもとづく教育・学習のシステムを継承していたからであろう。信道は、咸宜園の塾生ではなかったが、淡窓の個人的な門人であった。

坪井塾では、どのような教育・学習のシステムが採用されていたかあきらかではない。信道門下の緒方洪庵の適塾における教育・学習のシステムについてもかあきらかではないが、いくつか復元しようという試みがある。洪庵の義弟である緒方郁藏がひらいた独笑軒塾の「階級課業次第」が適塾の等級制をひきついでいるとして類推しようという試み²⁹⁾、適塾生の自伝である『福翁自伝』と『松香私志』から適塾の等級制を再現しようという試み³⁰⁾がある。これらを参考に、適塾の教育・学習のシステムの輪郭を描いてみよう。第1に、塾生は8級に等級化され、初級段階の塾生は『和蘭文典』前・後編により、オランダ語を習得する。第2に、中級段階の塾生は適塾に架蔵される「万物究理書」などを会読する。第3に、上級段階の塾生は「研究書応_レ其人_レ任_レ其好_レ」，すなわち自分の好みにより蘭書を繙読する。

大雑把にいえば、西洋医の養成を課題とする坪井塾では、学科課程は、オランダ語の習得に専念する初級課程、窮理学、舍密学などの医学の基礎学科に関する蘭書を繙読する中等課程、西洋医書を閲読したり、翻訳にたずさわったりしながら信道の臨床授業にくわる上級

課程・臨床課程からなる。それぞれの課程で、塾生は役割を分担する。中級生は、塾師として初級生に素読をさずけ、講釈する。上級生や臨床課程生は、塾頭、塾監として塾の運営に関与するだけでなく、坪井病院において「代診」をつとめなければならない。

坪井塾生は、まずオランダ語を習得しなければならない。大坂遊学時代に、オランダ語の基礎を習得していたとしても、周弼はあらたにオランダ語をまなばなければならない。それは、オランダ語の学習方法が劇変していたからである。周弼の蘭学の師の世代が師事した大槻玄沢の時代には、前野良沢が初学の門人のために天明5(1785)年に編集した『和蘭訳筈』により訳業にたずさわる。しかし、語彙もとぼしく、冠詞、代名詞、前置詞などの「助語」の知識、すなわち文法や構文に関する知識がないために蘭文の訳読法は未熟であった。信道の師宇田川玄真の時代には、長崎通詞志筑忠雄、すなわち中野柳圃の高弟である馬場佐十郎が江戸に招聘されたことにより、蘭書翻訳にはじめて文法を導入した柳圃の「遺教」が江戸にもたらされる。それは、「都下ノ舊法廢シテ新法正式ニ一變セルナリ」といわれるほどに画期的な出来事である³¹⁾。「新法」とは、オランダ語文法の知識にもとづくオランダ語原書の翻訳法である。オランダ語の規則体系を把握しなければ、正確な翻訳はできない。本格的な西洋医学の研究は、オランダ語の文法という概念が認識され、文法書、語彙集、辞書の編集がすすめられるなかで出現する。玄真は、すでに『遠西医範』を訳述し、その内容を簡略化した『医範提綱』を版行していたが、大槻玄沢と息子の玄幹の紹介により佐十郎に師事し、「新法」を会得する。玄真は、「新法」を習得したことにより、「譯業第二世」と呼ばれ、江戸蘭学界に確固たる地位をえただけでなく、文化10(1813)年には「翻譯加功ノ台命」をうけ³²⁾、蛮書和解御用の訳員に任命される。

信道の時代には、オランダ語を習得するための学習書としてウェーランド小文典とマートシカッペイ文法書が主流になる。天保期になると、原典によるオランダ語学習が顕著になるが、坪井信道はその中心的な存在である³³⁾。

坪井塾におけるオランダ語学習について、最初期の塾生のひとりである川本幸民の伝記には、つぎのようにしるされる³⁴⁾。

幸民が坪井誠軒の塾におつたころ、たまたま伊東玄朴が長崎から、和蘭の文典「ガラマンチカ」と「センタキス」の二冊を持ちかえつていたので、幸民は緒方洪庵、青木周弼と三人でこれを謄写し、相共にじつに血のにじむような刻苦精勵の後、ようやくしてその完譯に成功したが、わが邦で和蘭文典を講釋したのは、これが最初であるといわれ、この三人は信道門下の三哲として、その頃の蘭學書生の、崇敬的であつたという。

シーボルト (Philipp Franz von Siebold) のもとでまなんでいた玄朴がマートシカッペイ文法書を江戸にもちかえたのは文政11(1828)年11月である。伊東玄朴が下谷和泉橋通御徒町に象先堂をひらき、「マートシカッペイ文法書」を「塾課」としたのは天保4(1833)年のこ

とである³⁵⁾。「信道門下の三哲」は、玄朴が長崎からもちかえった「和蘭の文典」、すなわちマートシカッペイ文法書を筆写する。それを翻訳し、初学者への教授のために利用する。

川本幸民は、文化 7 (1810) 年に三田藩医の家に生まれ、藩学造士館にまなび、文政 12 (1829) 年、藩命により江戸におもむき、篠山藩医足立長雋^{ちようしゆん}のもとで修業する。天保元(1830)年 10 月、幸民は長雋にともなわれ、坪井塾に入門する。長雋は「自分の力量を以てしては、これ以上教うるに足らずとして、みずから幸民をつれて、坪井信道の門をたゞき、懇ろに幸民の將來を托した」³⁶⁾。足立長雋は、「得_二和蘭産科書_一、研_二究_一之_二以開_二一家_一」³⁷⁾、すなわち産科学の蘭書を研究し、西洋産科学の泰斗として知られる蘭学者である。信道の蘭学者としていかに名望があったか窺い知ることができる。幸民は、天保 4 (1833) 年 2 月には坪井塾をさる。「信道門下の三哲」は、天保 4 (1833) 年 2 月以前には、すくなくとも塾師としてマートシカッペイ文法書の訳書にもとづき、オランダ語を教授する立場にあった。

マートシカッペイ文法書は、オランダのマートシカッペイ公益協会 (De maatschappij: tot Nut van't Algemeen) が刊行したオランダ語文法教科書である。日本に舶載された『グランマチカ、あるいはオランダ語文法』(Grammatica, of Nederduitsche Spraakkunst) と『シNTAX、あるいはオランダ語の語形成』(Syntaxis, of woordvoeging der Nederduitsche Taal) は、それぞれ「ガランマチカ」と「セインタキス」と呼ばれ、天保期以降、オランダ語学習の入門書としてひろく使用される。箕作阮甫は、マートシカッペイ文法書を翻刻し、天保 13 (1842) 年に『和蘭文典』前編を、嘉永元(1848)年には『和蘭文典』後編を版行する。前編は「ガランマチカ」と通称され、題簽には「和蘭文典前編」としるされる³⁸⁾。天保 13 (1842) 年に板行される。全体は 62 丁、序言 (Inleiding) と 3 章からなる。第 1 章は音韻・文字論 (Over de letters en derzelver zamenvoeging tot lettergrepen en woorden)、第 2 章は品詞論 (Over de onderscheidene taal of rededeelen)、第 3 章は綴字論 (Over spelling) である。後編は「セインタキス」と通称され、題簽には『和蘭文典後編成句論』としるされ、嘉永元(1848)年に版行される³⁹⁾。全体は 49 丁、3 章からなり、第 1 章は単語の結合 (Over de verbinding van enkele woorden)、第 2 章は句中における語の配列順序 (Over de orde, waarin de woorden in eene rede op elkander moeten volgen)、第 3 章は部句の集合と種類 (Over het zamenstel en de onderscheidene soorten van volzinnen) である。『和蘭文典』が翻刻されてからは、オランダ語学習のための不可欠のテキストとして使用されることになる。

坪井信道の伝記によれば、安懷堂では、文政 12 (1829) 年に「ウエランド小文典」が学課としてはじめて使用される⁴⁰⁾。天保 2 (1831) 年ころに安懷堂に入門した青木周弼の伝記にも、つぎのような記述がみられる⁴¹⁾。

信道の教育方が最も斬新適切なものであつた。信道は蘭學を教授するのに、初めて和蘭文典—ウエーランドの文典—を用ひたので、學生の蘭文を讀解する力は極めて早く上達

した。

いずれも『新撰洋学年表』の記述に依拠したものである。信道が没した嘉永元(1848)年に女婿の信良が筆写したといわれる「日習堂蔵書目録」⁴²⁾には、「沕乙蘭土文典」、すなわちウェーランド小文典はふくまれるが、マートシカッペイ文法書はふくまれない。しかし、天保9(1838)年10月に淡輪太郎(中洲)という坪井塾生が書写した『和蘭文典』前編の一部がのこされている⁴³⁾。書写したのは、オランダ語の学習のためである。信道は、オランダ語の学習については、オランダ語を習得した塾生、すなわち塾師にゆだねていたのではないであろうか。信道にとっては、塾生がオランダ語で記述された西洋医書を解説する能力を身につけさえすれば、その方法は問題にはならない。

「信道門下の三哲」は、ウェーランド小文典によりオランダ語を習得するが、初学者に教授するさいにはマートシカッペイ文法書をもちいたということになる。ウェーランド小文典は、オランダの言語学者ウェイランド(Pieter Weiland)があらわした文法書である。ウェイランドは、オランダ語の綴字法の確立にとりくみ、1805年には『オランダ語文法』(Nederduitsche Spraakkunst)と『オランダ語文法基礎』(Eerste Beginselen der Nederduitsche Spraakkunst)を出版する。1799年から1811年にかけて『オランダ語文法辞典』(Nederduitsch taalkundig Woordenboek)を刊行する。この辞書は、19世紀前半のオランダ語辞書の基準となる。ウェイランドは、その後も文法書や辞書を編纂する。それらも長崎に舶載される。内容は、序文(Voorbericht)、概説(Leiding)、第一部の綴字論(Over de Spelling)、第二部の品詞論(Over de Onderscheidene Taaldeelen, of Deelen der Rede)からなる。本書は、安政3(1856)年に木村海蔵により『沕乙蘭土文範初篇』として版行される。

10年ほど時代はくだるが、安政3(1856)年4年ころの洪庵の適塾におけるオランダ語の学習風景をながめてみよう⁴⁴⁾。

先づ始めて塾に入門した者は何も知らぬ。何も知らぬ者に如何して教へるかと云ふと、其時江戸で翻刻になつて居る和蘭の文典が二冊ある。一をガランマチカと云ひ、一をセインタキスと云ふ。初學の者には先づ其ガランマテカを教へ、素讀を授ける傍に講釋をもして聞かせる。之を一冊讀了よみをはるとセインタキスを又其通りにして教へる。

適塾において、オランダ語の学習のためにつかわれたのは、『和蘭文典』、すなわちマートシカッペイ文法書である。周弼がウェーランド小文典によりオランダ語をまなんだとしても、塾師に素読をさずけられ、同時に講釈を聞くという学習法はかわらない。

周弼は、坪井塾において文法書によりオランダ語を復習する。入門後、1年ほどで塾師として後進にオランダ語を教授する立場にたつことになる。

II. 西洋医学の修業

周弼は、辞書をひもときながらオランダ語原書を読解することができるようになると、中級段階にすすむ。蘭書の講読のグループにうつり、会読にくわわる。会読は、荻生徂徠が儒学の教授・学習方法として導入したといわれる⁴⁵⁾。徂徠は、「師教よりは朋友の切磋にて知見を博め學問は進侯事に侯。(中略) 朋友に交り門風に染侯事は第一の事に侯」⁴⁶⁾と考え、学問にころごす塾生がたがいに自由な議論のなかで競いあい、切磋するために会読という協同学習を考案する。徂徠が導入した会読は、のちに萩藩学明倫館の第2代学頭になる徂徠の高弟山県周南にうけつがれる。周南から永富独嘯庵にうけつがれ、その門人亀井南冥にうけつがれる。その後、南冥の門人広瀬淡窓、さらに蘭学者の坪井信道、その弟子緒方洪庵へとうけつがれたといわれる⁴⁷⁾。周弼も例外ではない。

周弼も、蘭書を閲読しながら、会読にくわわる。周弼と同じ時期に坪井塾でまなんでいた塾生のなかに、文化6(1809)年に備後福山城下に生まれた寺地強平がいる。強平は、入門期はさだかではないが、天保8(1837)年まで坪井塾に在籍する。帰郷後、福山藩学誠之館の洋学寮教授に登用される。強平の碑にはつぎのように刻まれる⁴⁸⁾。

先生備後福山人、初學漢醫、方年十九、讀醫範提綱、概然曰、濟生眞理在此矣、文政十二年春、問業于京師、當時京阪間、原書未行、概唯講譯書、先生奮長崎遊、始讀蘭書、研精三年、遂東入江戸坪井信道之塾、與緒方洪庵及青木川本諸子日夕討論、業大進焉、天保八年歸郷

強平は、宇田川玄真が訳述した『医範提綱』を閲読し、「濟生眞理」が西洋医学にあると確信する。20年あまりまえに、漢方医学を修業していた信道も『医範提綱』を一読し、「番夷ノ説取ルニ足ラストシ齒牙ノモカケサリシ」が、「始メテ其説ノ切實ナルヲ知り」、蘭学修業を決意する⁴⁹⁾。強平は、文政12(1829)年に京都で開業するが、京都や大阪では、当時、原書による西洋医学の教育・研究がおこなわれていなかったために、長崎に遊学し、はじめてオランダ語原書を目にする。3年後、江戸におもむき、坪井塾に入門する。坪井塾では、周弼などの「信道門下の三哲」の「討議」にくわわり、学業がすすんだという。「討議」は、広義の会読または輪読である。

坪井塾でも、昇級するにしたがい、初歩的な課書から難解な課書にうつる。信道の没後、坪井塾は佐渡三良、すなわち信道の女婿信良にうけつがれる。坪井塾で会読のさいにえられた課書は、信良の時代にもかわらなかったであろう⁵⁰⁾。

月に何回か、例へば一・六とか三・八とか日を定めて、一同が集まつて塾頭の支配で回読を遣り又は講釈があつた。教科書としては初歩のものとしてエスボルチングの生理学、ヤンキーヘンキーの問答書と言ふやうなものが一般に行はれてゐた。

坪井塾では、1, 6, 11, 16, 21, 26日といった毎月の定日に会読がおこなわれ、塾師に

よる課書についての講釈もおこなわれる。会読にうつったばかりの学習グループは、「エスポルチングの生理学」、「ヤンキーヘンキーの問答書」といった初歩的な蘭書を課書にえらぶ。「エスポルチングの生理学」は、坪井塾に架蔵される「イスホルデンク」である。「イスホルデンク」、すなわちドイツ人イスフォルディング (J. N. Isfording) については、宇田川玄真、緒方洪庵、広瀬元恭にそれぞれ『伊斯忽爾陳屈教示内外科学徒窮理説』、『医家須読理学入門』、『理学提要』という訳著があり、宇田川・坪井一門で重視された教科書である⁵¹⁾。

坪井塾では、会読がどのようにすすめられたか、実態は把握できない。信道門下の洪庵の適塾の会読風景をながめてみる⁵²⁾。

會讀は一六とか三八とか大抵日が極つて居て、いよいよ明日が會讀だと云ふ其晩は、如何な懶惰生でも大抵寝ることはない。ゾーフ部屋と云ふ字引のある部屋に、五人も十人も群をなして無言で字引を引きつゝ勉強して居る。夫れから翌朝の會讀になる。會讀をするにも籤で以て此處から此處までは誰と極めてする。會頭は勿論原書を持て居るので、五人なら五人、十人なら十人、自分に割當てられた所を順々に講じて、若し其者が出来なければ次に廻す。又其人も出来なければ其次に廻す。其中で解し得た者は白玉、解し傷ふた者は黒玉、夫れから自分の讀む領分を一寸でも滞りなく立派に讀んで了つたと云ふ者は白い三角を付ける。夫れは只の丸玉の三倍ぐらゐ優等な印で、凡そ塾中の等級は七、八級位に分けてあつた。而して毎級第一番の上席を三ヶ月占めて居れば登級すると云ふ規則で、會讀以外の書なれば、先進生が後進生に講釋もして聞かせ不審も聞いて遣り至極深切にして兄弟のやうにあるけれども、會讀の一段になつては全く當人の自力に任せて構ふ者がないから、塾生は毎月六度づゝ試験に逢ふやうなものだ。

会読は、昇級試験でもある。毎月6度、1日、11日、21日、あるいは6日、16日、26日といった、あらかじめ決められた期日に、会読がおこなわれる。適塾に架蔵される蘭書のなかから課書がえらばれ、あらかじめ範囲がつかえられる。会読の前夜には、『ゾーフ・ハルマ』が置かれる「ゾーフ部屋」は、会読の準備にあたる塾生であふれる。会読の日、参加者がそろったところで、会頭は籤引きにより各メンバーが担当する箇所を決める。会頭は、机のうゑに判定簿と課書1冊をならべ、各メンバーが課書の担当部分をすこしづつ訳読するのを聞く。坪井塾の塾師は、適塾では会頭と呼ばれる。正確に訳読すれば、○印、誤訳であれば●印を判定簿にする。担当部分をよどみなく訳読すれば△印がしるされる。それは○印の3倍に相当する。解説ができないばあいや誤読のばあいには、つぎのメンバーが訳読する。適塾では、塾生は8級に等級化されていたが、3ヶ月のあいだ当該等級の主席を維持したばあいに、進級がみとめられる。

私塾では、塾生の総代である塾頭の統轄のもとに学習活動が展開する。坪井塾をひきついで信良の時代には、つぎのようであった⁵³⁾。

坪井信良先生の先考信道先生は、蘭学塾を開かれ、多くの子弟を教育された有名な蘭方医で、信良先生も亦医業を嗣いで塾を継承されて居たのである。当時の蘭学塾は何れも塾主が自ら教へるのではなく、塾頭が確^{しつか}りしてゐるかどうかで其塾の価値が定まるのであつた。

信良は、塾内の教育・学習活動については、すべて塾頭にゆだねたようである。しかし、信道は「講釈」を毎朝の日課としていただけでなく、窮理書、舎密書などの基礎課程をおえた塾生のために専門課程の授業を担当する。周弼が坪井塾で解剖学、生理学、薬物学、病理学などの講釈を聞いたといわれるが、それは毎朝の講釈である。オランダ語の習得に専念する塾生も聴講するために、専門的なものではなく、西洋医学の全体像を解説するような内容であつたとおもわれる。

専門課程の授業は、「臨床・病理総合討議会」あるいは「病床側授業」ともいうべき臨床授業である⁵⁴⁾。まず、信道がみずから診察した経験がある症例を提示し、その症例について「医按」を作成させ、提出させる。「医按」とは、患者の性別、年齢、症例、病名、原因、予後、治法、摂生について、塾生が自分の知識と文献にもとづき書きしるした、いわゆる治療指針である。臨床授業は、3と8の日、すなわち3、8、13、18、23、28日といった定日におこなわれ、信道が毎回2通の「医按」を講評するという授業である。

坪井塾付属病院では、代診制が採用される。信道が、朝食後、往診にでかけたのち、毎日、上級課程や臨床課程の塾生2名が通院患者の診察・治療にあたる⁵⁵⁾。臨床授業は、臨床実習と密接に関連づけられていたとおもわれる。

この臨床授業は、嘉永期(1848～1854)におこなわれていたことはたしかであるが、周弼もすくなくとも原型となる授業に参加したとおもわれる。それは、この授業が開塾以来、信道が養成しようとした医師像と密接不可分にむすびついていただとおもわれるからである。信道がめざす医師像について一瞥しておく。

信道は、深川冬木町に日習堂をひらいたとき、つぎのようにしるしている⁵⁶⁾。

予不_レ揣_二庸_一劣夙従_二事于斯学_一、欲_丙以_レ翻_二訳西書_一誘_甲導蒙士_上、為_乙生涯之任_甲

今日斯学之隆、豈唯止_二于此_一乎。予不_レ揣_二庸_一劣夙従_二事于斯学_一、欲_丙以_レ翻_二訳西書_一、誘_甲導蒙士_上、為_乙生涯之任_甲

今日、蘭学が盛行しているが、さらに隆盛におもむくであろう。自分は凡庸の身にもかかわらず、蘭学に専念し、蘭書を翻訳し、初学のものを嚮導することを生涯の使命としようと決意したという。坪井塾は西洋医学塾である。信道が西洋医の育成に熱意をもっていたことがうかがわれる。宇田川玄真門下で、信道の3年後輩の箕作阮甫が編集した日本最初の医学雑誌である『泰西名医講』二輯によせた信道の序⁵⁷⁾から、信道が想い描く医師像が窺い知れる。

凡病不_レ待_レ治、而自治者。十居_二八九_一。是庸醫之所_二以能立_一于世也。其必待_レ治而後能治者。治_レ之洵難矣。雖然非_二能治_一其難_レ治。何足_二稱_一醫乎。是古今良醫之所_二以焦_一思苦心。以求_二其方_一灋也歟。友人津山侍醫箕作庠西。嚮有_二名醫彙講_一之著。其爲_レ著。集_二録遠西名醫_一、能治^{スル}難_レ治之技倆工夫者也。夫遠西醫書之航_二于我_一東方者固多矣。而欲_レ知_二其起_一痾_レ痺_レ癰之良法奇術。莫_レ若_二讀_一實驗書焉。

病は、治療をほどこすことなく、ほとんどが自然に治癒する。そのために、數医者が世にはばかる。治療をほどこすことによって治癒するというが、治療することは容易ではない。しかし、難治の病を治癒させることができなければ、医者を自称することはできない。そのために、古今の良医が苦心し、思い悩み、治療法を探求してきた。阮甫があらわした『名医彙講』は、西洋の名医が難治の病を治療するために考案した技術や工夫の事例を収録した論文集である。おおくの西洋医書が日本にも舶載されるが、難病治療の妙法を知ろうとすれば、おおくの症例に目をとおさなければならない。

信道の師の宇田川玄真は、蘭書講読が普及浸透していない状況では、みずから臨床医としてひとりひとりの患者の治療にあたるよりは、訳著をとおし西洋医学の治療法を身につけた医者がひろく治療にあたるほうが効果的であると考え、西洋医薬書の訳述に専念する。玄真は、幾多の訳業をとおし、オランダ語を習得していない医者に西洋医学の知識を提供することによって、また西洋医学の知識を身につけた西洋医を輩出することによって、近代医学の基礎をきずく。しかし、信道の時代には文法書や辞書がしだいにととのい、原書主義が台頭する。その中心にあった信道は、蘭書を繙読する能力を身につけ、おおくの臨床例をまなんだ西洋医をおくりだすことを使命と考える。

信道は、玄真の風雲堂に入門し、3年を経た文政6(1823)年には、玄真のすすめにより『プールハーフェ箴言註解』(Verklaaring der korte stellingen van Herman Boerhaave; Over de kennis en geneezing der ziekten)の翻訳に着手する。プールハーフェ(Herman Boerhaave)は、「当代全ヨーロッパの師表」として崇敬される18世紀のオランダを代表する内科学者である。1701年から1738年までライデン大学で医学を講じ、「詳しい病歴の聴取、
スタートゥスプレゼンス正確な_二現_一症_一の記述と分析、診断、治療法の設定、予後の判定、という近代診療の定石的な輪郭」をつくりあげる。画期的な臨床医学をまなぶために、ヨーロッパ全土からプールハーフェのもとに蟄集する。ライデン大学は、「十八世紀前半における西洋医学のメッカ」となる⁵⁸⁾。

プールハーフェは、『医学指針』(Institutiones medicae)と『診断治療箴言』(Aphorismi de cognoscendis et curandis morbis)というふたつの代表的な著書をのこす。『医学指針』は、1708年に刊行される。当時のヨーロッパの大学における医学教育の伝統的な分類にしたがひ、生理学、病理学、症候学、衛生学、治療学の5分野に関する簡潔な定説をしるしたものであ

る。ブールハーフェは、『医学指針』の記述をおぎなうために、翌1709年に『診断治療箴言』を刊行する。『診断治療箴言』は、「内科と外科の両分野を扱い、各疾病あるいは各創傷ごとにその定義、原因、病気が悪化した場合の結果および治療法を総合的に論じている医学書」である⁵⁹⁾。ブールハーフェは、『診断治療箴言』を『医学指針』と同様に講義テキストとしてつかう。講義のさいには詳細な解説をくわえたであろうが、簡潔な箴言がしるされているだけである。ブールハーフェの没後、高弟ファン・スヴィーテン (Gerard van Swieten) は、師の講義筆記の箴言に註解をほどこし⁶⁰⁾、1741年から1772年にかけて、ラテン語版の『ヘルマン・ブールハーフェ診断治療箴言註解』(Commentaria in Hermanni Boerhaave aphorismos de cognoscendis et curandis morbis) を刊行する。1823(文政6)年6月に長崎のオランダ商館に着任したシーボルトは、翌年、鳴滝に医学塾をひらくと、「ブールハーフェの教え」を実行する⁶¹⁾。同時期に、江戸と長崎でブールハーフェの移植がはじまったことになる。

信道は、文政9(1826)年前半に『ヘルマン・ブールハーフェ診断治療箴言註解』の蘭訳書を訳了し⁶²⁾、『万病治準』⁶³⁾と題する20巻の稿本にまとめる。しかし、『万病治準』は、その

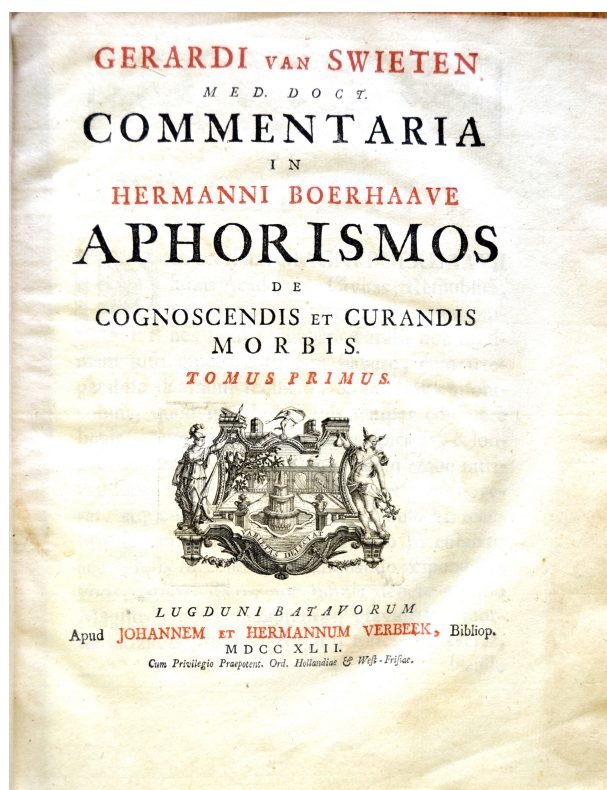


図2 ヘルマン・ブールハーフェ診断治療箴言註解 (ラテン語版)⁶⁴⁾

ままでは内科診断学書として臨床で使うことはできない。信道は、『万病治準』を訳述しながら西洋医学の内科診断学書の構想をねっていたが、同年12月には西洋医学の内科診断学マニュアルの性格をもつ『診候大概』を脱稿する。『診候大概』は、たんなる翻訳書ではなく、「『蒲爾花歇^{フルハーヘ}、万病治準』の訳了後、その全巻をよく消化、吸収した上で、その大意を縮めて成ったもの」⁶⁵⁾である。『診候大概』は、「診断学ノ著述ハ坪井誠ノ診候大概ヲ以テ嚆矢トスベシ」⁶⁶⁾といわれる。診候とは、現代医学用語では診断を意味し、江戸期には診病、診方、察病などとも表記れる。信道は、『診候大概』序につぎのようにしるす⁶⁷⁾。

診候、所_下以視_二病症_一而察_中病本_上。医者措_二診候_一、則無_下以察_二病本_一之道_上。不_レ察_二病本_一、而能治_二其病_一、万々無_二此理_一。雖_レ然、医者非_下先知_中内部有_二何等之變_一、則外面發_二何等之症_中、則雖_レ診_二外症_一、無_レ益_二於知_二内本_一。故欲_二診候_一者、必先知_二其内理_一。内理既明、而後内變發_二於外_一者、可_レ得_レ察也。蓋俗医之臨_二患者_一、亦必診候。故曰、遲脈数、舌黄舌黒、腹虚弱、腹堅満。而至_二其病本_一、則無_二深論_一之。是与_下不_二診候_一者_上何以別乎。而尚且欲_レ治_二其病_一、事之難莫_レ甚_レ焉。猶_下不_レ諳_二斗極_一事_中航海_上、終不_レ知_二所_一向。縱令病有_二幸自癒_一者、固不_レ得_レ謂_二医者治_一之也。是豈実学者之所_二自執_一哉。今此冊子所_レ記者、実其大略耳。雖_二則大略耳_一、若能由_レ此入、専念刻苦、多經_二歴実事_一、庶_二幾乎寡_一過。

診断は、病症を観察し、病因をつきとめる手段である。医者が診断しなければ、病因をつきとめることはできない。病因をつきとめることができなければ、その病気を治療することはできない。しかしながら、医者は、体内になんらかの異変があれば、外面になんらかの兆候があらわれることを知らなければ、外面の兆候を観察したとしても、体内の病因を知る手がかりにはならない。したがって、診断しようとするものは、まず内臓の機能をあきらかにしなければならない。内臓の機能をあきらかにしたうえで、内臓の異変が外面にどのようにあらわれるのか観察しなければならない。俗医は、患者にむかえば、かならず脈遅、脈数、舌黄、舌黒、腹の虚弱、腹の堅満について問診する。しかし、その病因について熟思することはない。それは診断とはいえない。それにもかかわらず、その病気を治療しようとしても、それは至難の業というしかない。それは、方位を知らないまま航海に出るようなものである。たとえ病気が幸いに治癒したとしても、医者が病気を治療したとはいえない。それは、実学者が実践すべきものではない。いま、この冊子がしるすのは、その大略だけである。大略であるにしても、それにしがたい、専念刻苦し、おおくの症例を経験すれば、過失が少なくなる。

本文は、「診候本旨第一」、「流体第二」、「凝体第三」、「別男女第四」、「問年五」、「視形第六」、「診脈第七」、「候胸腹第八」、「診舌第九」、「験冷熱第十」、「候神識第十一」、「問飲食第十二」、「問寤寐第十三」、「検溺第十四」、「検尿第十五」、「問所曾患之病第十六」、「問平日之

動止第十七」の17項目からなる⁶⁸⁾。「診候本旨第一」は、疾病について定義したうえで、診断の要訣をしめす。

人之身別之、則凝流兩部。人之病別之、則凝流兩部之病。病也者、変常之謂也。故医疾病者診凝流兩部之变也。

人身は、凝体と流体からなる。ひとの病は、凝体と流体の病である。疾病は、常態の変により生じる。したがって、医者が疾病を診察するのは、凝体と流体の変化をみるというところにある。「凝体第三」は、総論的に診断のための手順について言及する。

凡欲診凝流二体者、当須別男女、問年、視形、診脈、候胸腹、診舌、驗冷熱、候神識問飲食、問寤寐、検溺、検屎、問曾患之病、問平日之動止。

凝体と流体を診るばあいには、男女をわけ、年齢を問い、人身の表面を観察し、脈をとり、胸や腹を触診し、舌を診、意識をうかがい、飲食について問い、睡眠について問い、尿を検査し、大便を検査し、既往症について問い、日常生活について問わなければならない。診断にさいし、男女を区別するのは、男女は生活様式がことなるだけでなく、諸臓器や諸液もことなり、疾病やその治療法がことなるからである（「別男女第四」）。患者の年齢を問うのは、年齢により凝体と流体に変化が生じ、生体に変化するからである（「問年第五」）。患者の身体のある部分を観察したり（「視形第六」）、脈拍をはかたり（「診脈第七」）、胸や腹を触診したり（「候胸腹第八」）、「於身体内部之中、可以日直視之处、止於舌与口之裡面」、すなわち身体内部のなかで目で直視できる舌と口を観察したり（「診舌第九」）、あらゆる方法で患者の病態をさぐったうえで、診断をくださなければならない。

安永3(1774)年の『解体新書』の刊行を契機として、漢方医学から西洋医学へと転じるものが増加する。その訳者のひとりである杉田玄白は、漢方医学を抛棄した理由についてつぎのように述べている⁶⁹⁾。

支那之書者有方無方也、非無法、所以為法者不明也、其法也、人々阿所好、設說作論、立以為法也、故十書十說、未一定焉

漢方医書には「方」、すなわち薬方はあるが、「法」、すなわち原理がない。原理があったとしても、根拠がない。人びとがそれぞれ好みにしたがって説をとって、それが原理であると主張する。諸説紛々し、いまだに定説がない。しかし、西洋医学には流派は存在しない。それは、「信實明徴皆據_テ實物_ニ而爲_シ言_ヲ未_ダ嘗_テ虚設_ノ而空論_セ」⁷⁰⁾、すなわち信実明徴であり、実物にもとづき論説し、虚偽を空論することがないからである。西洋医学は、解剖学、生理学、病理学という原理のうえになりたち、診断のための有効な基準を提供する。

伊東玄朴の象先堂については、「醫師は不_レ及_ニ申兵_マ炮火_ヲ技_ヲ爲_ス稽古_ヲ江戸_ノ罷越_ス侯人_々皆_ニ以_テ同_ニ人_ト宅_ニ寄_リ留_ル」⁷¹⁾といわれる。坪井塾では、塾生はオランダ語を習得し、解剖学、生理学、病理学などの西洋医書の閲読に専念する。「医按」を作成したり、臨床実習にのぞむために、

あらかじめ、信道が著した『診候大概』をテキストとして、脈拍を数え、体温を測定し、患者の病状、診断、予後などについて実践的にまなび、最終段階の臨床授業、それにむすびついた臨床実習により臨床医としての経験をつむ。

周弼は、嘉永3(1850)年8月、萩藩医学校の会頭役として医学教育の刷新をうったえる建言書⁷²⁾を提出する。そのなかには、「學術之儀ハ實學實驗を旨とし空論鑿説ニ拘泥すへからず」、「讀書の儀ハ博采通覧を旨とし(中略)純粹簡要ニして日用事实的切之处ニ着眼注意肝要」といった提言がみられる。蘭書の講読だけを重視すれば、空理空論にかたむく。幾多の西洋医書を繙読したとしても、つねに臨床応用性を念頭にすべきである。信道の臨床主義の理念は、周弼にうけつがれる。

Ⅲ. 訳業

周弼は、独看の段階にすすみ、初級生のためにマートシカッペイ文法書を講じたり、会読の進行役をつとめたりしながら、蘭書を独力で読む。疑義があるばあいには、先輩に教えるを乞い、さらに師の信道に教えるを乞う。独看の段階の塾生があつまり、蘭書を会読することもある。信道は、風雲堂に入門3年後の文政6(1823)年には、宇田川玄真のすすめにより『ブールハーフェ箴言註解』の翻訳に着手する。信道は、文政11(1828)年ころには「神経熱之書」を1日おきに仲間と会読しながら訳述にたずさわる⁷³⁾。周弼と同時期の緒方洪庵は、坪井塾入門後1年半あまりたった天保3(1832)年12月には『人身究理学小解』を訳了する。「日習堂蔵書目録」によれば、日習堂にはオランダ語の原書50種、写本15種が架蔵されていた。そのなかに、「ブリュメンバック原生」、「ヘーマンス原生」、「依百乙原生」、「ローセ原生」、「リセランド原生」といった生理学書が架蔵されていた。洪庵が翻訳したのは、「ローセ原生」、すなわちドイツ人内科医ローゼ(Theodor Georg August Roose)が著した原著をオランダ人内科医イプマ(Martinus Sjoerdzoon Ypma)が蘭訳した『人体物理学便覧』(Handboek der natuurkunde van den mensch)である⁷⁴⁾。

坪井塾では、蘭書の翻訳は、業をおえるにあたり、蘭書の翻訳にたずさわるのが慣例になっていたのではないであろうか。周弼も、在塾中に坪井塾に架蔵される蘭書の翻訳にたずさわったとおもわれるが、訳稿は管見にはいらない。

オランダ語を習得したとはいえ、蘭書の翻訳にさいしては各種の辞書にたよらざるをえない。坪井塾には、つぎのような辞書が架蔵されていた⁷⁵⁾。

○原書の部

沔乙蘭土字書	11本
沔乙蘭土学語	1本
アブラハン字書	2本

麻林字書	2 本
ハンノット字書	2 本
フランス文典	1 本
○写本の部	
道訳ハルマ	8 本
道訳ハルマ ^マ	20本

「沔乙蘭土字書」は「坪井本の『詳解オランダ語辞典』」,「沔乙蘭土学語」は「ウエイランドの『学術用語辞典』」,「ハンノット字書」は、長崎に舶載されたジャック・アンノ共編のラテン語辞典『羅蘭辞典』(Jacques, B. & S. Hannot, *Dictionarium latino-belgicum*. Dordraci, Th. Goris; Rotterdami, P. vander Slaart, 1699)である。いずれも、ゾーフ・ハルマなどに記載されていない単語をしらべるために利用したものである⁷⁶⁾。そのほかに、「道訳ハルマ」や「麻林字書」もふくまれる。「道訳ハルマ」、すなわちゾーフ・ハルマは、長崎のオランダ商館長ヘンドリック・ドーフ(Hendrik Doeff)が中山得十郎、吉雄権之助など11名の通詞の協力により文化9(1812)年に編纂をはじめ、天保4(1833)年に完成した蘭和辞書である。フランス人ハルマ(François Halma)の『蘭仏辞典』(*Woordenboek der Nederduitsche en Fransche Taalen*) 1729年第2版にもとづき編纂したものであり、5万語を収録する。稲村三伯が編纂した『波留麻和解』が「江戸ハルマ」と呼ばれるのにたいし、『長崎ハルマ』と呼ばれる。「麻林字書」とは、オランダに移住したフランス人語学教師マーリン(Pieter Marin)が編纂した仏蘭辞書である。マーリンの辞書は、何種類か長崎に舶載されるが、そのなかの『仏蘭語の基本概念と用法の学習のための新方法』(*Nouvelle méthode pour apprendre les principes et l'usage des langues françoise et hollandoise*)は、文化11(1814)年から同14年ころにかけ、長崎のオランダ通詞の本木正栄、榊林高美、吉雄永保によって編訳される。『仏郎察辞範』とよばれる日本最初の仏和辞書である⁷⁷⁾。稿本4巻、全247丁の仏和辞書は、1775年版の原本を底本とし、幕府の命により、オランダ商館長ドーフの指導のもとに編集される。マーリンの仏蘭辞書については、「昔長崎にて西善三郎ハ『マーリン』の釋辭書を全部翻譯せんと企しと聞しか手初迄にて事成らず」といった経緯もある⁷⁸⁾。

しかし、当時の辞書の訳語は簡略である。たとえば、宇田川玄真は“klier”というオランダ語の訳語として「腺」という国字、すなわち和製漢字をつくりだすが、『道訳法児馬』⁷⁹⁾にあたれば、「体中にあつて諸液を分泌するもの」という訳語があてられる。翻訳にさいしては、文意を汲み、適切な訳語を考案しなければならない。

「日習堂蔵書目録」によれば、日習堂にはオランダ語の原書50種、写本15種が架蔵されていたが、文法書、辞書などをのぞけば、塾生が閲読できる蘭書は50種あまりにすぎない。周弼も、洪庵もほとんど読みつくしたであろう。天保5(1834)年ころ、「薬品のことを勉強し

たければ榛齋先生につくがよい」⁸⁰⁾ という信道のすすめにより、周弼は洪庵とともに深川万年橋の近くに隠居する宇田川玄真のもとにかよう。玄真には、『和蘭薬鏡』、『遠西医方名物考』といった薬学に関する訳著がある。『和蘭薬鏡』は、「和蘭ノ本草及ヒ其薬説ニ關ル書二十餘種ヲ譯定ノ是ヲ和漢ノ諸説ニ稽徴シ名物允當性効確實ナル品物ヲ擇テ形狀主治驗方製劑ニ至ルマデ悉ク類纂シ」たものである⁸¹⁾。「本格的な植物由来の医薬の書としては最初」のものである⁸²⁾。『遠西医方名物考』は、「金石土鹽及ビ動物ニ屬スル品物」⁸³⁾、すなわち西洋の「鉱物由来、動物由来の医薬」⁸⁴⁾をイロハ順に配列し、薬物の産地、形状、製薬法、調剤法、薬効、用薬法などを記載したものである。玄真は、天保5(1834)年11月14日に発病し、翌12月4日に没する⁸⁵⁾。玄真の最晩年の門弟である周弼と洪庵は、1年にも満たないみじかい期間であるが、玄真のもとで修業する。

玄真は、ふたりの将来を嘱望し、周弼には「フーヘランドの病學書」、洪庵には「コンスブルッフ及コンラザーの病學書」の翻訳を命じる⁸⁶⁾。その経緯について、信道は『病学通論』序につぎのようにしるす⁸⁷⁾。

自享保中始 允讀洋書、於今百有餘年。賢豪輩出。其鑿書經譯者、不下數百種。然解體新書、鑿範提綱之外、大抵方藥書、而及原生原病之學者、未曾聞之。豈非由學者欲速成哉。蓋西醫之道、以明人身内景為本。原生原病次之。而後藥劑治方從之。譬諸構室、内景礎也、原生原病柱也、藥劑治方樓屋也。今也礎而未柱、遽然架屋、無此理也。我榛齋先生有見於此。使緒方公裁、青木周弼譯原病書數部、欲以折衷衆說、歸諸簡明也。凶幾先生捐館。遺命公裁、繼其志。公裁乃游長崎、親接蘭客、反覆質疑。再取原書、而鑽研之、又參考諸書、苦心焦思。十換裘葛、更稿者七八、今春始克成編、將上木伝世。

享保年間(1716～1736)に蘭書の翻訳がはじまり、すでに100年あまりの歳月がすぎた。その間、賢豪が続出し、医書の翻訳は100種以上にたった。しかし、『解體新書』や『医範提綱』のほかは、おおむね薬書であり、病理学書を翻訳したものはいない。それは、学者が速成をもとめるためであろう。西洋医学は、人体の内部構造をあきらかにすることを基本とする。病理学がそれにつぎ、薬剤治法はさらにそれにつぐものである。建物にたとえれば、人体の内部構造が礎石であり、生理学(原生)と病理学(原病)が支柱であり、薬剤治法が屋根である。現在は基礎の段階であり、いまだに支柱もたっていない。突然に屋根をかけるのは理にかなわないことである。榛齋、すなわち玄真は緒方洪庵と青木周弼に期待し、病理学書を翻訳させ、衆説と折衷し、簡明な手引き書を作成させようとした。ほどなく玄真は長逝するが、洪庵に遺言し、志をつがせる。洪庵は、長崎にあそび、オランダ人に接触し、質疑をくりかえす。ふたたび原書をひもとき、研鑽し、また諸書を参考し、苦心焦思する。10年の歳月をついやし、7、8回も稿をあらため、今春脱稿し、まさに上梓し、公にする。

洪庵は、玄真の没後15年経た嘉永2(1849)年に『病学通論』を板行する。ベルリン大学教授フーフランド(Christof Wilhelm Hufeland)の『病理学』(Pathologie, of ziektekunde), ドイツの開業内科医コンスブルック(Georg Wilhelm Christoph Consbruck)の『病理学総論ハンドブック』(Handboek der algemeene ziektekunde), ゲッチンゲン大学教授コンラヂ(Johann Wilhelm Heinrich Conradi)の『病理学総論ハンドブック』(Handboek der algemeene ziektekunde) 3書をおもに参看したといわれる⁸⁸⁾。洪庵は、玄真に託された「病學書」をすべて訳述したことになる。

『西洋学家訳述目録』⁸⁹⁾の周弼の項にはつぎのような書目があげられる。

医院類案察病編	一
袖珍内外方叢	三
病理論	

『病理論』は、玄真にすすめられ、訳述にとりかかったものであろう。病気により中断せざるをえず、坪井塾を辞したのちに訳了したと考えられるが、訳稿が現存するか否か不明である。^{しゅうちんないげほうそう}『袖珍内外方叢』は、周弼が天保8(1837)年秋から1年ほど長崎に滞在したさいに、緒方洪庵、伊東南洋(岡海蔵)とともに共訳したものである。

周弼は健康をそこね、天保6(1835)年春に帰郷する。故郷では、周弼は健康の回復をはかりながら医業にたずさわり、かたわら弟研蔵や門生に西洋医学やオランダ語をおしえる。天保7(1836)年初夏に母もんが病没したのを契機に、翌天保8(1837)年7月、研蔵や門生をともない長崎におもむき、1年ほど滞在する。長崎には、緒方洪庵の姿もあった。たんなる偶然ではないはずである。洪庵は、周弼とおなじころ江戸詰の父佐伯惟因^{これより}とともに郷里足守にかえる。洪庵は、その後、大坂におもむき、旧師中天游の思思斎で蘭学を教授していたが、天保7(1836)年2月に長崎へ旅立つ。そのころ、長崎には、佐藤泰然、林洞海、岡海蔵、三宅良斎などの遊学生がいた。

周弼は、長崎滞在中、石崎、植林、坂根、工藤などの通詞諸家をたずね、教えをもとめる⁹⁰⁾。そのかたわら、『袖珍内外方叢』の翻訳にとりくみ、天保8、9年ころに脱稿する。『袖珍内外方叢』は、処方総論、製薬の方法、薬品、処方術について概説する実用的な処方書である⁹¹⁾。『袖珍内外方叢』は板行されなかったが、管見では、早稲田大学図書館⁹²⁾、金沢市立玉川図書館近代資料館蒼龍文庫⁹³⁾、滋賀医科大学附属図書館河村文庫⁹⁴⁾に写本が所蔵される。これらは、いずれも初期の写本であり、序文が欠落している。伊東南洋が校訂したさいに書きくわえた天保15年4月付の序文⁹⁵⁾から翻訳の経緯を窺い知ることができる。

此書と蘭紀元千八百二十九年、謨烏普刺歇氏之所著、西洋方書之最新渡者、余之遊崎陽也、與緒方洪庵、青木周弼等、譯之稿始成、校未竣而往々傳播世間、猶河水一決、汎濫不可防也、余恐其誤人不少、亦猶濫流蕩激、使人陷溺也、於是、更訂正數過、授門人、

謄寫十有五部，以頒同好，惟是急于拯陷溺，未遑上梓，冀四方之君子，据此書，以正往愆，則吾知免矣。

原著は、「普刺歇」，すなわちドイツ人内科医ブラッゲ（Martin Wilhelm Plagge）がオランダ語であらわした『ベルギー薬局による薬局方』（Receptboek volgens de Pharmacopoea Belgica. Een zakboekje voor genesk. en heelmeeesteren）である⁹⁶⁾。1829(文政12)年にオランダで刊行され，長崎に舶載されたばかりのものである。長崎遊学中，青木周弼，緒方洪庵，宇和島藩の医師伊東南洋（岡海蔵）が共訳するが，稿本のまま写本が流布する。何度か誤訳を訂正し，門人に15部謄写させ，同好者に配布する。三人のほかに，翻訳にかかわったものがいたことが窺われる。

早稲田本，蒼龍文庫本，河村文庫本には，異同がみられるが，原型にちかいいとおもわれる蒼龍文庫本の構成はつぎのとおりである⁹⁷⁾。

袖珍内外方叢卷之一目錄

第一綱 山物

第一目 可燃體

第二目 [酸類]

第三目 羅僞塩及土類

第四目 [塩類]

第五目 [硫羅僞塩]

第六目 金属及其製劑

其一 銀

其二 水銀

其三 [銅]

其四 [鉄]

其五 錫

其六 鉛

其七 亜鉛

其八 安質没扭

其九 毘私繆篤

其十 砒石

袖珍内外方叢卷之二目錄

第二綱 植物

第一目 麻醉藥

其一 青酸麻醉藥

- 其二 苦味麻醉薬
- 其三 本性麻醉薬
- 其四 酷厲揮発性麻醉薬
- 第二目 酷厲薬
- 其一 浸蝕酷厲薬
- 其二 揮発酷厲薬
- 其三 胡椒性酷厲薬
- 其四 華兒斯性酷厲薬
- 第三目 吐薬
- 第四目 下薬
- 第五目 華爾斯性薬
- 袖珍内外方叢卷之三目録
- 第八目 揮発油性薬
- 其一 的列並油性薬
- 其二 羯布羅性油薬
- 其三 土木香油性薬
- 其四 臭油薬
- 其五 甘油性薬
- 其六 香油薬
- 第九目 苦味薬
- 其一 本性苦味薬
- 其二 護謨性苦味薬
- 其三 解凝性苦味薬
- 第十目 収斂性薬
- 第十一目 植酸
- 第十二目 亜的兒性薬
- 第十三目 糖性薬
- 第十四目 護謨性薬
- 第十五目 殻粉性薬
- 第十六目 油性薬
- 第十七目 石鹼性薬
- 第三綱 [動物]
- 第一目 発泡薬

第二目 [揮発薬]

第三目 欠

第四目 糖性薬

第五目 膠性薬

第六目 蛋清性薬

第七目 [脂性薬]

袖珍内外方叢附録目録

近世新所發明之諸薬品

其一 [山物]

其二 [植物]

其三 [動物]

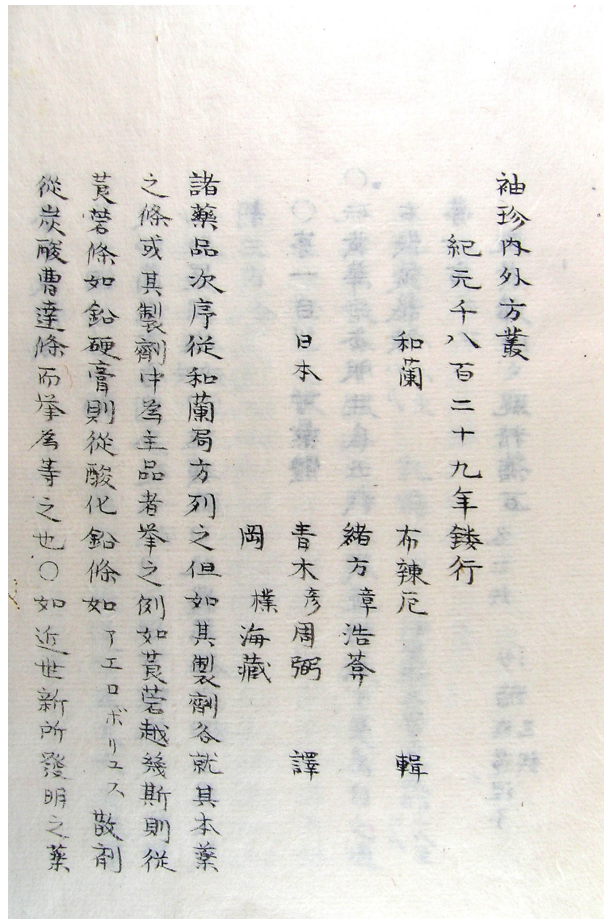


図3 袖珍内外方叢⁹³⁾

宇田川玄隨が訳述した『西説内科撰要』18巻は玄隨の生前には第9巻までしか板行されなかったが、養嗣子玄真により補訂され、文化7(1810)年には全巻が板行される。以後、内科的治療のために薬物研究がさかんになる。玄真は、『和蘭薬鏡』、『遠西医方名物考』を訳述する。その晩年の門生である周弼と洪庵が訳述した薬物書は、高価な舶来の薬種ではなく、身近な薬種を実際の治療にもちいることを念頭にしたものである。

安政5(1858)年5月、長崎で「印度霍乱」、すなわちコレラが発生し、全国的に流行する。8月には、防長2国でもコレラが猛威をふるい、洞庵の指揮により好生館員が治療と防疫にあたる。周弼は、藩主敬親に随従し、6月に萩にかえっていたが、モスト(G. F. Most)の『医事韻府』(Encyclopedisch Woordenboek der Praktische Genees-, Heel, en Verloskunde)⁹⁸⁾などを訳述し、「豫防及治療書」を作成する⁹⁹⁾。「豫防及治療書」は、藩内のコレラの予防と治療のために活用される。

藩主敬親は、同年8月に「世上一般之流行病印度霍乱ニ而 御機嫌相」になる¹⁰⁰⁾。周弼は、刺絡をほどこしたり、阿芙蓉、すなわち阿片を投与したりし、快癒させる。『袖珍内外方叢』巻之二の第二綱には植物由来の薬物が列挙される。その第一目の麻醉薬のなかに阿芙蓉に関する記述がみられる。14の処方のうち、いくつかの処方を例示する¹⁰¹⁾。

阿芙蓉

為散丸或酒浸阿芙蓉液或水浸水製越幾剂每服八分匕六分匕四分匕三分匕半匕至一匕

精製阿芙蓉半匕二匕 乳糖一匁

一二〇 痙攣諸病精神錯乱等每服一匕二匕三匕至四匕

○第一方 治精神錯乱

精製阿芙蓉半匕二匕 乳糖一匁

右調勻製剂二箇臨卧取一剂冷水送下後四分時未得睡者進後服

○第二方

ドーヘルス
挖歌兒私發汗散〔各〕十匕

右製二剂用法同前

○第三方 治赤痢

阿芙蓉三匕 吉納二匁 桂末四匁

右調勻分十二服每一時一服冷水送下

○第四方

精製阿芙蓉五匕 甘草膏二匁 蒸餾水適宜

右合為六十九丸每一時半服四丸不寐症臨卧服十丸

○第五方

挖歌兒私發汗散一匁 甘草膏二匁 蒸餾水適宜

右為三十九丸臨卧服十五丸後四分時不得眠者再服十五丸惡散剂者以此代第四方

阿芙蓉は、「本性麻醉薬」であり、「精神錯乱」、「虚性熱病」、「赤痢」などの治療のためにもちいられる。

周弼が長崎をおとずれたのは、長崎には、清国だけでなく、オランダからさまざまな薬種が舶載されるが、それらの薬種の治験を開業医として確認しようという意図があったからであろう。その副産物が『袖珍内外方叢』である。長崎での成果は、藩主敬親のコレラの治療に役立てられただけでなく、流行病や難治の病気の治療のためにも活用される。

漢方医学がコレラにたいして有効な手立てをもたなかったのにたいし、西洋医学はコレラにたいしても有効な処方提示する。周弼の臨床医としての活動は、西洋医学の臨床医学としての有効性を証明する。ちなみに、この安政5(1858)年7月、幕府は漢方界の総帥である多紀家が抵抗するなかで、「廣く萬國の所長御採用被遊侯折柄に付御醫師中も有志の者は和蘭醫術兼學致し侯とも不苦侯」との達¹⁰²⁾をだし、官医に西洋医術の採用を許可する。

周弼の訳述書のひとつに「医院類案察病編」がある。京都大学附属図書館富士川文庫には、下記のような2種の標題が類似した資料が所蔵される。

＊(独) 昆斯骨夫著・(蘭) 越面宝幾訳・伊藤玄朴(冲齐)重訳、『医療正始』24巻、附載書・合綴書：附 医院類案、天保6～弘化3年

＊ 昆斯骨夫著、箕作阮甫・青木周弼訳、『医院類案』2巻

『医療正始附醫院類案』は、伊東玄朴が訳述したことになるが、実際には阮甫が訳述したものである¹⁰³⁾。杉田玄白が蘭書を「大部の物といへども力の及へる程ハ費へを厭す購ひ求め」た¹⁰⁴⁾ように、玄朴も高価な蘭書を購求する。阮甫は、天保5(1843)年に江戸八丁堀に開院するが、火災にあい、病院だけでなく、高価な蘭書までうしなう¹⁰⁵⁾。玄朴は、「翻訳が飯より好きな」阮甫に「いくばくかの金子を与え」、象先堂に架蔵される『臨床医学基礎』を訳させ、自分の名義で訳書を版行する¹⁰⁶⁾。

ふたつの資料の訳述に阮甫がかかわるだけでなく、両資料ともに原著者が「昆斯骨夫」である。まず原著者は「昆斯骨夫」、すなわちオーストリア人医学者ビショッフ(Iganz Rudolph Bischoff)である。ビショッフは、1747年8月にオーバー・オーストリアのクレムス・ミュンスターに生まれる。1813年にはプラハの外科医院(medizinische Klinik für Wundärzte)の教授となり、1826年にはウィーンに招聘され、ヨーゼフ医科アカデミー(medizinisch-chirurgische Josephs-Akademie)教授に就任する。ビショッフは、1823年から1825年にかけて『臨床医学基礎』(Grundsätze der praktischen Heilkunde durch Krankheitsfälle erläutert: zum Gebrauche für Wundärzte)、1829年には『病院における治療方法の記述』(Darstellung der Heilungsmethode in der medicinischen Klinik)を刊行する¹⁰⁷⁾。『臨床医学基礎』は、第1巻『外科医のための症例解説』(Krankheitsfälle erläutert: zum Gebrauche für Wundärzte, Prag

1823), 第 2 巻第 1 部『外科医のための胸部および下腹部の炎症説の症例解説』(Die Lehre von den Entzündungen der Brust und des Unterleibes durch Krankheitsfälle erläutert: zum Gebrauche für Wundärzte, Prag 1823), 第 2 巻第 2 部『頭部および頸部の器官の炎症説の症例解説——とりわけ幼年期の急性脳水腫および皮膚性ジフテリアを念慮して』(Die Lehre von den Entzündungen der Organe des Kopfes und des Halses durch Krankheitsfälle erläutert: mit besonderer Rücksicht auf die hitzige Gehirnwassersucht des kindlichen Alters und auf die häutige Bräune, Prag 1825) の 3 冊からなる。『臨床医学基礎』は、オランダ人エルディック (Cornelis van Eldik) により蘭訳され、蘭訳書 (Grondbeginsels der praktische Geneeskunde) が長崎に舶載される。

富士川文庫所蔵の『医療正始』には、各編に「医院類案」が付され、「各病に就て一々病例を挙げ、其既往症・現在症・経過・治療方等を示してある」¹⁰⁸⁾。両資料とも、阮甫がかかわったところから、当初、『醫院類案』は『醫療正始』に掲載された症例に関する記述を抜粋したものではないかと推察した。

『醫院類案』は、周弼と阮甫と訳述分担したものであり、板行されない。富士川文庫本は、表紙の題簽がはがれたためか、表紙に直接「醫院類案」としてされる。冒頭に「毘斯骨夫目録」、すなわち目次がしるされる。「毘斯骨夫目録」の構成はつぎのとおりである。周弼が分担した第二篇以下は、やや詳細にしるす。

序文

名義

區別

標記

○第一篇

診候總撰

診候儀則

診候心法

第一查照原繇

第二查照経歴及主証

診候總括

嬰兒診候

○第二篇

疾病之判断

論判断疾病之則

疾病之識定

○第三篇

論疾病之治療

論記案之法

少年強壯夫人所患真^熾衝熱兼^損肺^熾衝其經過整列者之例

○療則

疾病區別

熱病論篇

熱病總論

熱病經過

熱病原因篇

熱病傳歸

熱病預後

医院類案第二編
疾病之判斷
長門 青木 周弼 譯稿
諸事件ヲ聚採シ專一ニ試験スルヲ察病之要務タリ今
是ヲ精密ニ行フテ后其諸症ト上ニ証明セル原因ト連属
結統スル所以ヲ溯洄シ是ニ由テ人休内部ノ变化推明ス
ルヲ務ムベシ
當今患ル處ノ疾病他病ニ善ク通シラ具有スル諸症ト
唯其疾病ニ而已固有シ之ニ由テ他病ト異ナル所ノ諸
症トヲ詳悉ニ區別スヘシ尙其諸病種ノ流行病ト比較
ノ異同ヲ徵シ此較スレバ其疾病自ラ晰然ト心領

図4 医院類案察病編

熱病療法

第一生力療法

第二見症療法

寛解療法

快復療法

○熱病各論篇

熱病差別

阮甫は、天保5(1834)年に江戸八丁堀に居をかまえ、「箕作医院」をひらく。天明7(1787)年に板行された『紅毛雑話』¹⁰⁹⁾には、「病院」という“gasthuis”の漢訳語がみられる。「医院」も、中国洋学書から「病院」の概念をあらわす新語として導入されたものである。「医院」は「醫術ヲ行フ所」という意味(『大言海』)である。「類案」は類似した症例について考察するという意味である。

「昆斯骨夫目録」からうかがわれるとおり、『醫院類案』は診察のためのマニュアルであるが、症例は一例しか掲載されない。1815年2月に診察をうけた「侍婢年十九」の「眞^{マコト}瘧^{マラリア}衝^{ショウ}熱^{ネツ}」の症例である。『醫療正始』にも、「一^一壯^{ゾウ}婦^フ眞^{マコト}純^{ジュン}瘧^{マラリア}衝^{ショウ}熱^{ネツ}瘧^{マラリア}後^ゴ再^{サエ}感^{カン}スル^{スル}治^チ驗^{ゲン}」，すなわち「侍婢」の「眞^{マコト}瘧^{マラリア}衝^{ショウ}熱^{ネツ}」の症例が掲載されるが、「年二十歳」であり、1816年2月の症例である。『醫院類案』が症例の概略をしるすのにたいし、『醫療正始』は患者の体質、来院時の症状、投薬などの治療の内容、経過などを詳細にしるす。『醫院類案』の原著は、ビショッフの蘭訳著『臨床医学基礎』であるが、『醫療正始』の原著とはことなり、しかも部分訳である。『西洋学家訳述目録』の周弼の項にあげられる「醫院類案察病編」の書名は、周弼が訳述分担した第二篇以下を内容的に「察病編」と表現したものとおもわれる。

周弼は、いつごろ『醫院類案』を訳述したのであろうか。『医院類案』は富士川文庫本には成稿年代を特定する手がかりはない。周弼は、天保2(1831)年ころから天保6(1835)年春まで江戸に滞在し、その間、坪井塾や宇田川玄真の隠居先で阮甫と知遇をえたのであろう。しかし、江戸遊学中に訳述したとはおもわれない。周弼は、嘉永4(1851)年3月以降は御添匙医として、安政2(1855)年8月以降は御側医として、文久3(1863)年12月16日に萩の自宅で病没するまで、6回にわたり藩主敬親の参勤に扈従する。江戸滞在中、周弼は遊学中の知己としばしば旧交をあたためていた。江戸滞在期間は、最短で4ヶ月、最長で13ヶ月である。共訳とはいえ、訳述を分担したために、周弼の江戸滞在中に打合せがおこなわれたのであろう。

周弼がどのような意図で『醫院類案』を訳述したのか、周弼が訳述した第二篇「疾病之判斷」の冒頭部分から窺い知ることができる¹¹⁰⁾。

諸事件ヲ聚採シ、專一ニ試験スルヲ察病之要務タリ。今是ヲ精密ニ行フテ、后其諸症ト

上ニ証明セル原因ト連属結続スル所以ヲ溯洄シ、是ニ由テ人体内部ノ変化推明スルヲ務ムベシ。

診断症例をあつめ、治験を検討することが「察病」、すなわち診断の要諦である。精密に診断し、症状から推断される病因とのかかわりにたちもどり、身体内部に生じる変化をあきらかにすべきである。周弼は、かつて信道が作成した「診候大概」のような内科診断マニュアルを作成し、萩藩医学校の臨床課程で使用したのではないかとおもわれる。

おわりに

周弼は、坪井信道と宇田川玄真のもとで修業し、オランダ語でしるされた西洋医書を講読し、それを臨床に応用しようという宇田川・坪井の学統を継承する。しかも、この学統は基礎医学から臨床医学にいたる学科課程を明確に認識していた。しかし、玄真が原書講読が普及浸透していない状況では、みずから臨床医としてひとりひとりの患者の治療にあたるよりは、訳著をとおし西洋医学の治療法を身につけた医者がひろく治療にあたるほうが効果的であると考え、西洋医書書の訳述に専念する。玄真は、幾多の訳業をとおし、オランダ語を習得していない医者に西洋医学の知識を提供することによって、また西洋医学の知識を身につけた西洋医を輩出することによって、近代医学の基礎をきずく。しかし、信道の時代には文法書や辞書がしだいにととのい、原書主義が台頭する。その中心にあった信道は、みずから蘭書を解説する能力を身につけたうえで、おおくの臨床経験をつんだ西洋医をおくりだすことを使命と考える。

青木周弼が修習した西洋医学の種子は、周弼によって萩藩に移植され、周弼の藩医としての活動の場だけでなく、周弼が創設に関与した萩藩医学校における教育活動の場においても開花する。

【註】

- 1) 松尾耕三、『近世名醫傳』巻之三、島村利助、明治19年（青史社、1980年復刻）、10～11丁。
- 2) 日野宗春談、伊内左助速記、「日野宗春翁雑談」、山口県文書館所蔵。
- 3) 日野宗春撰写、「青木周弼略伝」、山口県文書館所蔵。
- 4) 文部省、『日本教育史資料』九、富山房、明治23年（鳳文書館、昭和63年復刻）、177頁。
- 5) 岡原義二、『青木周弼』、青木周弼先生顕彰会、昭和16年（大空社、1994年復刻）、15頁。
- 6) 田中助一、『防長医学史』上巻、防長医学史刊行後援会、昭和28年（聚海書林、昭和59年復刻）、182頁。
- 7) 「明倫館御再興一事」、山口県文書館所蔵。
- 8) 御蘭生翁甫、『防府文教小史』、防長文化研究会、昭和12年、19頁。
- 9) 「行程記写」萩～三田尻、山口県文書館所蔵。
- 10) 『青木周弼』、79～83頁。
- 11) 阪谷朗庵撰、「寺地強平先生碑」、五弓豊太郎編、『事実文編』第四、国書刊行会、明治44年、179

- ～180頁。
- 12) 篠崎弼書,「斎藤方策墓誌」,書写年不明,早稲田大学図書館所蔵。
 - 13) 田中助一,『防長医学史』下巻,防長医学史刊行後援会,昭和28年(聚海書林,昭和59年復刻),209頁。
 - 14) 斎藤方策・中環中訳,『把而翁湮解剖図譜』下編,文政壬午秋(文政5年)小石龍序,思思斎蔵,出版地不明,早稲田大学図書館所蔵。
 - 15) 緒方富雄,『緒方洪庵伝』,岩波書店,昭和17年,6頁。
 - 16) 今村亮編,『洋方医伝』,明治17年(青史社,1980年復刻),39頁。
 - 17) 「塾則」,青木一郎編著,『坪井信道詩文及書翰集』第一部,岐阜県医師会,昭和50年,313～315頁。
 - 18) 「入門式」,青木一郎,『坪井信道の生涯』,杏林温故会,昭和46年,226～227頁。
 - 19) 「塾則」,『坪井信道詩文及書翰集』第二部,154～156頁。
 - 20) 『青木周弼』,94頁。
 - 21) 赤松範一編注,『赤松則良半生談』,平凡社,1977年,15頁。
 - 22) 「診候大概序」,『坪井信道詩文及書翰集』第一部,309～311頁。
 - 23) 「蜚英館学規」,亀井南冥・昭陽全集刊行会,『亀井南冥・昭陽全集』第一巻,葦書房,昭和53年,380頁。
 - 24) 『懷旧桜筆記』巻11,日田郡教育会,『増補淡窓全集』上巻,大正14年(思文閣,昭和46年復刻),138頁。
 - 25) 田中加代,『広瀬淡窓の研究』,ぺりかん社,1993年,341頁。
 - 26) 「消權種目」,中島市二郎,『教聖広瀬淡窓の研究』,第一出版協会,昭和10年,254～255頁。
 - 27) 『懷旧桜筆記』巻11,138頁。
 - 28) 文化12年10月7日の条,『懷旧桜筆記』巻16,『増補淡窓全集』上巻,201頁。
 - 29) 慶應義塾編刊,『慶應義塾百年史』上巻,昭和33年,39頁。
 - 30) 緒方富雄,「緒方洪庵適々斎塾のこと」,『日本医事新報』第688号,昭和10年11月,32～34頁。
 - 31) 大槻茂質撰,『蘭学梯航』巻之下,出版年不明,出版者不明,出版地不明,早稲田大学図書館所蔵。活字本。
 - 32) 同上。
 - 33) 杉本つとむ,『江戸時代蘭語学の成立とその展開』Ⅱ,蘭学者による蘭語の学習とその研究,早稲田大学出版部,1977年,1142頁。
 - 34) 小沢清躬,『蘭学者川本幸民』,川本幸民顕彰会,昭和23年,16～17頁。
 - 35) 大槻如電,『新撰洋学年表』,伯林社書店,昭和2年(昭和38年再版),118頁。
 - 36) 『蘭学者川本幸民』,13頁。
 - 37) 『洋方医伝』,33～34頁。
 - 38) Maatschappij tot nut van't Algemeen 編,『和蘭文典』前編,天保13(1842)年,箕作氏(美州):1822年刊第2版の翻刻,早稲田大学図書館所蔵。
 - 39) Maatschappij tot nut van't Algemeen 編,『和蘭文典』後編,嘉永元(1848)年,箕作氏(美州):1810年ライデン刊の翻刻,早稲田大学図書館所蔵。
 - 40) 『坪井信道の生涯』,82頁。
 - 41) 『青木周弼』,93～94頁。
 - 42) 『坪井信道詩文及書翰集』第二部,308～316頁。
 - 43) 斎藤信,『日本におけるオランダ語研究の歴史』,大学書林,昭和60年,181頁。
 - 44) 『福翁自伝』,慶應義塾,『福澤諭吉全集』第7巻,昭和34年,66頁。
 - 45) 茂住実男,「会談について」,『大倉山論集』第3輯,平成5年12月,100頁。
 - 46) 「徂徠先生答問書」下,島田虔次編,『荻生徂徠全集』第1巻,みすず書房,1973年,468頁。
 - 47) 「会談について」,100頁。
 - 48) 阪谷朗廬撰,「寺地強平先生碑」,五弓豊太郎編,『事実文編』第四,国書刊行会,明治44年,179～180頁。
 - 49) 坪井信良摘記,「示児安貞」,「坪井信道所部太郎松尾多勢履歴一件」。「示児安貞」は,信道が9歳になった長男信友(安貞),のちの二代信道にあたえた自伝的家訓である。

- 50) 『赤松則良半生談』, 15頁。
- 51) 松田清, 『洋学の書誌的研究』, 臨川書店, 平成10年, 670頁。
- 52) 『福翁自伝』, 68～69頁。
- 53) 『赤松則良半生談』, 13～14頁。
- 54) 緒方富雄, 「坪井信道塾の研修記録としての前田信輔筆『日習堂医按』」, 『日本医学雑誌』第16巻第3号, 昭和45年9月, 160～161頁。
- 55) 「先考行實遺漏」, 「坪井信道所郁太郎松尾多勢履歴一件」, 山口県文書館所蔵。筆記者の氏名は明示されないが, 「示児安貞」と筆跡がおなじであるところから, 坪井信道の女婿である信良がしるしたものと思われる。
- 56) 「贈=同学=」, 壬辰夏日(天保3年), 『坪井信道詩文及書翰集』第一部, 291～293頁。
- 57) 箕作阮甫纂述, 坪井信道序, 『泰西名医彙講』二輯, 序, 天保8(1837)年, 須原屋伊八(江戸), 京都大学附属図書館所蔵。読点筆写。
- 58) 川喜田愛郎, 『近代医学の史的基盤』上, 岩波書店, 1977年, 350頁。
- 59) クレインス・フレデリック, 『江戸時代における機械論的身体観の受容』, 臨川書店, 平成18年, 298頁。
- 60) 『近代医学の史的基盤』上, 372頁。
- 61) Martin Wiegard Jongsma, 「プールハーフェとフォン・シーボルト, 医学と恩師たち」, 『杏林医学会誌』第15巻第1号, 1984年3月, 9頁。
- 62) 『坪井信道の生涯』, 67頁。
- 63) 蒲爾花歇著, 斯微甸註, 坪井信道訳, 『蒲爾花歇万病治準』20巻, 写本, 金沢市立玉川図書館近代資料館蒼龍文庫所蔵。
- 64) 広島修道大学図書館貴重書コレクション所蔵。
- 65) 阿知波五郎, 『ヘルマン・プールハーヴェ(1668-1738) —その生涯, 思想, わが蘭医学への影響』, 緒方書店, 昭和44年, 282頁。
- 66) 富士川游, 『日本医学史綱領』2, 平凡社, 1974年, 103頁。
- 67) 「診候大概序」, 『坪井信道詩文及書翰集』第一部, 309～311頁。
- 68) 青木一郎訳注, 『診候大概』, 岐阜県医師会, 昭和53年。以下の記述は本書による。
- 69) 杉田玄白, 「狂医之言」, 『日本思想史大系』64, 岩波書店, 1976年, 241頁。
- 70) 我爾徳兄著, 宇田川玄随訳, 桂川甫周校閲, 『内科撰要』序, 寛政8(1796)～9年, 須原屋市兵衛, 早稲田大学図書館所蔵。
- 71) 伊東栄, 『伊東玄朴傳』, 玄文社, 大正5年(昭和53年復刻, 八潮書店), 148頁。
- 72) 「御直書控」嘉永三年, 山口県公文書館所蔵。
- 73) 坪井信道書翰, 藤野勤所宛, 文政11年2月12日付, 『坪井信道詩文及書翰集』第二部, 86頁。
- 74) 石田純郎, 『緒方洪庵の蘭学』, 思文閣出版, 1992年, 34～35頁。
- 75) 『坪井信道詩文及書翰集』第二部, 308～316頁。
- 76) 松田清, 「坪井家旧蔵本の洋学資料」, 『静脩』第31巻第2号, 1994年9月, 2頁。
- 77) 吉岡秋義, 「『仏郎察辞範』と『和仏蘭対訳語林』に就いて」, 『長崎大学教養部紀要』人文科学5, 1965年3月, 91頁。
- 78) 大槻茂質撰, 『蘭学階梯』巻下, 天明3(1783)年跋, 出版年不明, 出版者不明, 出版地不明, 早稲田大学図書館所蔵。
- 79) F. Halma 原著, Hendrik Doeff 編著, 吉雄権之助他訳, 写年不明, 坪井信道(写), 早稲田大学図書館所蔵。
- 80) 『緒方洪庵傳』, 9頁。
- 81) 宇田川榛斎訳述, 宇田川榕菴校補, 『新訂増補蘭薬鏡』18巻, 文政11(1828)年序, 青藜閣, 早稲田大学図書館所蔵。
- 82) 石田純郎, 『蘭学の背景』, 思文閣出版, 1988年, 227頁。
- 83) 「凡例」, 宇田川榛斎訳述, 宇田川榕菴校補, 『遠西医方名物考』巻之一, 文政5(1822)年榕庵序, 風雲堂蔵版, 青藜閣, 早稲田大学図書館所蔵。
- 84) 『蘭学の背景』, 227頁。
- 85) 宇田川榕菴, 『宇田川榕自叙年譜』, 出版年不明, 書写年不明, 写(自筆), 早稲田大学図書館所蔵。

- 蔵。
- 86) 『青木周弼』, 94~95頁。
 - 87) 「題言」, 緒方章訳述, 宇田川瀛・坪井信道序, 『病学通論』, 出版年不明, 河内屋卯助 (大坂), 早稲田大学図書館所蔵。
 - 88) 『緒方洪庵の蘭学』, 87~92頁。
 - 89) 穂亭主人編, 安政元(1854)年序刊, 28丁, 国立国会図書館所蔵。
 - 90) 酒井シヅ, 「蘭館長ニーマンと長崎留学生」, 『日本医史学雑誌』第21巻第1号, 昭和50年1月, 16~17頁。
 - 91) 『緒方洪庵伝』, 28頁。
 - 92) 緒方洪庵, 青木周弼, 岡海蔵訳, 卷之1~3, 書写年不明, 一部蘭栄亭蔵用箋使用。
 - 93) 和蘭布辣危輯, 緒方章浩葦・青木彦周弼・岡樸海蔵譯, 上・中・下巻, 書写年不明。
 - 94) 緒方洪庵, 青木周弼, 岡海蔵訳, 乾・坤巻, 書写年不明。
 - 95) 『青木周弼』, 104頁。
 - 96) 『緒方洪庵の蘭学』, 36~37頁。
 - 97) 綱目を記載し, 細目は省略する。[] 内は標題が欠落するために, 早稲田本と蒼龍文庫本により補った。
 - 98) 板垣英治, 「壮猶館, 卯辰山養生所, 医学館の医学洋書」, 『北陸医史』第28巻第1号, 2007年2月, 49頁。
 - 99) 『青木周弼』, 316~318頁。
 - 100) 「官事諸記 青木周弼事歴」(写)。
 - 101) 傍線部, 割注。
 - 102) 「和蘭醫術採用ノ旨ヲ達ス」, 安政5年7月6日, 吉野真保, 『嘉永明治年間録』卷七下, 安政5年戊午, 甫喜山景雄, 明治16年。
 - 103) 蘭学資料研究会編, 『箕作阮甫の研究』, 思文閣出版, 昭和53年, 271頁。
 - 104) 杉田玄白, 杉田玄端・杉田廉卿序, 『蘭学事始』下之巻, 明治2年, 天真楼, 早稲田大学図書館所蔵。
 - 105) 『箕作阮甫の研究』, 272頁。
 - 106) 同上書, 279頁。
 - 107) Allgemeine Deutsche Biographie.
 - 108) 「箕作阮甫と『外科必読』」, 大鳥蘭三郎, 『医学書誌論考』, 思文閣出版, 昭和62年, 203頁。
 - 109) 森嶋中良編輯, 『紅毛雑話』卷之一, 天明7(1787)年, 須原屋市兵衛 (日本橋北室町), 早稲田大学図書館所蔵。
 - 110) 句読点, 筆者。

Zusammenfassung

Medizinisches Studium von Shūsuke Aoki

MORIKAWA Jun

Shūsuke Aoki ist im Jahre 1803 als der erste Sohn eines Dorfarztes im abgelegenen Dorf des Hagi-Daimyats geboren. Er studiert nicht nur die altchinesische Heilkunde, sondern auch die westliche Medizin. Im Jahre 1839 wird er als ein Leibarzt des Hagi-Daimyats davon ernannt, den Ruhm als einer westliche Arzt zu bekommen. Welche akademische Tradition der westlicher Medizin führte er als der erster westliche Mediziner in den Hagi-Klan ein? In dieser Studie möchte ich seinen Stufenkarrieren der westlicher Medizin verfolgen.